

紙屋悦子の青春

2006(平成18)年6月27日鑑賞〈東映試写室〉

★★★★



監督＝黒木和雄／原作＝松田正隆／出演＝原田知世／永瀬正敏／松岡俊介／小林薫／本上まなみ（パル企画配給／2006年日本映画／113分）

……『父と暮せば』（04年）と同じように、まるで舞台を観ているような映画では、俳優たちの演技力が決め手！ 昭和20年3月30日の「お見合い話」から始まる数日間の「出来事」を通して、悦子の青春とあの時代の若者たちの生き方が、俳優たちの静かな、しかし、しっかりとした演技力によってアピール！ 若者たちの凶悪犯罪が続出している今、どんなお説教よりも、こんな映画を観せる方が効果的だと思うのだが……。黒木流の良質な映画がこれで最後になったのは、実に残念。黒木和雄監督に合掌……。



『父と暮せば』に続く名戯曲の映画化！

『父と暮せば』（04年）は井上ひさしの名戯曲の映画化だったが、この『紙屋悦子の青春』は松田正隆の名戯曲の映画化。また『父と暮せば』は、宮沢りえと原田芳雄の2人芝居が中心で、その舞台もほとんど家の中だけだったが、『紙屋悦子の青春』の舞台も、悦子（原田知世）が紙屋安忠（小林薫）とふさ（本上まなみ）夫婦とともに住む紙屋家の家の中がほとんど。その家の中で昭和20年3月30日におきた悦子の「見合い話」から始まる数日間の出来事が個性豊かな俳優たちの演技を通して描かれるが、その中には「あの戦争」と悦子の青春の想いがいっぱい……。

『父と暮せば』について、私は「『日本映画の良心ここにあり！』と拍手を送りたい」と書いた（『シネマルーム4』291頁参照）が、それはこの映画も同じ。もっとも今年4月12日に黒木和雄監督が急逝したため、その拍手の「受け手」がいなくなったのは、実に残念。人間のナマの姿に骨太に迫っていく今村昌平監督の

死亡や「あの戦争」を描く第一人者黒木和雄監督の死亡は、日本映画界にとって実に残念なことだが、それに変わる若い才能も次々と登場しているため、そこに期待しなければ……。

「あの戦争」は回想シーンから……

鹿兒島に住む紙屋安忠・ふさ夫婦と安忠の妹である悦子が登場する、昭和20年3月30日の一家3人の食事時の話題は、悦子の見合い話。安忠が悦子に見合いの相手として紹介したのは、紙屋家の誰もがよく知っている海軍航空士官の明石少尉（松岡俊介）ではなく、その同僚の永与少尉（永瀬正敏）。

なぜ明石少尉ではなく永与少尉なのかは、ストーリーが進むにしたがって少しずつわかってくるが、映画の冒頭は、病院の屋上のベンチに座っている老夫婦の会話のシーンから。妻の方は原田知世が老け役を演じていることがすぐにわかるが、夫の方は一体ダレ……？

ショットとカット、そしてシーンとシークエンス……？

私が6月25日（日）にはじめて実施された映画検定4級を受けるべく、前日に1日だけ必死に勉強して得た知識の1つが、「ショット」と「カット」、そして「シーン」と「シークエンス」の違い。ショットとは「映像の単位で、時間的に連続して撮影されたフィルムの頭のコマから末尾のコマまでを1ショットと数える」もので、カットとは「日本ではショットの意味で使われることが多いが、監督が『カット』と言うと、そのショットの撮影が終了したことを意味する」もの。また、シーンとは「1つの場所あるいは特定の人物の行動を連続して描写したショットの集合体」であり、シークエンスとは「シーンが集まって1つの場所やエピソードになったもの」のこと（『映画検定 公式テキストブック』182頁参照）。したがって、この屋上の場面はかなり長く続くが、ショットではなくシーン。すると、このシーンのためのショットは、果たしていくつ……？

そんなことを考えながら観ていたが、この屋上のシーンは想像以上に長いもの……。そしてそのシーンが終わるや、スクリーン上には「昭和20年3月30日」という字幕が現れ、一挙に六十数年前にフラッシュバック……。ちなみに、「あの

戦争」を浮かび上がらせるために回想シーンを使ったのは、『男たちの大和／YAMATO』（05年）も同じ……。

漬け物、お芋、おはぎ、そしてお茶、赤飯

この映画の面白い特徴（？）は、食事のシーンが多いこと。見合い話を悦子に切り出す前に、先に夫婦で食事をしている時の話題は、配給の漬け物そしてちょっとすっぱい（？）お芋……。すっぱいという意味は、まだ腐っていないから食べられるという意味……。そして、今日3月30日と翌3月31日の見合いの日、そして安忠が熊本の工場から休暇をもらって戻ってきた4月8日、この3日間には、おはぎそして静岡のお茶や赤飯の話題が盛んに登場する。

今の日本のような飽食の時代においては、食べ物のありがたさを実感することはかなり難しくなっているため、若者たちの食べることへの欲求・欲望は驚くほど低い。ということは別の言い方をすれば、何かを食べることができる喜びも全然ないということ……。？ そんな若者たちには是非、この映画が描く「食の実態」を見て、いろいろと考えてほしいもの……。

本上まなみの演技は特筆モノ……

特筆すべきは、そんな食べ物で大きな存在感を示す、本上まなみの演技。実年齢は原田知世より9歳も若い彼女が、悦子の同級生であり同時に義理の姉さんという地味な役柄ながら、兄と妹、そして紙屋家を訪れる2人の海軍航空士官との「つなぎ役」として、実にいい味を出している。

緊張したシーンの中、掛け合い漫才のようにフツと笑いを誘うようなシーンが数回登場するが、その功績はベテラン俳優小林薫の演技力だけではなく、本上まなみの功績が大……。

やはり日本人には桜……

屋上のベンチで語り合う老夫婦が思い出したのが、あの鹿児島紙屋家の庭にあった1本の立派な桜の木。見合いの話が持ち込まれたのが3月30日なら、その実施日は何と翌31日。しかし、その日は安忠が徴用で熊本の工場へ出発しなければ

ばならない日。兄嫁のふさに同行を勧めたため、結局その見合いは、悦子が1人で受けることに……。

2人だけのおはぎを囲んだぎこちない見合いの様子は、スクリーン上で是非味わってもらいたいが、その3月31日はまだ桜の花は咲いていなかった。しかし、次の訪問で永与少尉からの「求婚」を承諾した4月8日には、桜は満開。そして、「明日は出撃」と明石少尉が安忠らに告げにきた4月12日には、既にその桜は散りかけていた。さらに、明石少尉から出撃直前に預かったという悦子宛ての手紙を持って永与が家を訪ねてきた日には、既に桜は散ってしまっていた……。

わずか2週間ほどの日々の移り変わりの中で、これほど大きく人の運命は変わっていくわけだが、それを見守るに最もふさわしい花はやっぱり桜……。

波の音はどこから……？

この映画で桜とともに大きなポイントになるのが波の音。といっても、ホントに紙屋家の人々の耳にそれが届いているのかどうかは微妙……？ だって、屋上のベンチで語り合う老夫婦も耳を澄ませば、あの時のあの波の音が聞こえてくるというのだから、それはひょっとして空耳……？ いやいや、そんなことはない。海軍航空士官として飛行機に乗り、南の空へ飛び立っていった明石少尉たちのことをホントに心の底から考えれば、悦子や永与たちの耳には、ホントにあの時のあの波の音が聞こえてきても何も不思議ではないからだ。

問題は、波の音とともに明石少尉が悦子や永与に、今何を語りかけているのかということ。そしてそれを考えさせるのが、この映画の、そして黒木和雄監督の狙い。

サッカーのW杯をめぐる日本代表チームへの実力を無視した過度な期待が、一瞬にしてしぼんでしまったが、あのマスコミやサポーターたちのバカ騒ぎは、まさに日本の国力を無視したあの戦争への過度の期待と全く同じもの……。したがって、あの戦争の犠牲者の1人が明石少尉なら、中田英寿や柳沢敦そしてジーコ監督もその犠牲者の1人かも……？

そんなことを考えながら、あなたも耳を澄ませて静かに波の音を聞いてみる必要があるのでは……？

宮沢りえに続いて、演技派女優、原田知世に期待！

宮沢りえは今や日本を代表する演技派女優に成長したが、これはさまざまな作品を通して、良き監督からの指導があったおかげ……。『父と暮せば』における宮沢りえの演技は絶品だったが、この『紙屋悦子の青春』における原田知世の演技もなかなかのもので、彼女が黒木和雄監督の指導よろしきを得て、演技派女優として大きく成長していることを、十分実感できるはず。もっとも、この作品に限らず最近の原田知世は、『サヨナラ COLOR』（04年）、『大停電の夜に』（05年）、『姑獲鳥（うぶめ）の夏』（04年）と立て続けに出演して、それぞれにいい味を出していることは私の映画評論で書いたとおり（『シネマルーム 8』187頁、『シネマルーム 9』284頁、『シネマルーム 9』393頁参照）。彼女には出演作は少なくともいいから、ホントにいい作品でしっかりとした存在感を示すことができる演技派女優に成長してもらいたいものだ。

『出口のない海』『俺は、君のためにこそ死ににいく』との連続性……？

今年9月には佐々部清監督の『出口のない海』が、そして来年初夏には石原慎太郎東京都知事製作総指揮・脚本の『俺は、君のためにこそ死ににいく』が公開される。前者は特殊潜航艇回天による特攻を、後者は鹿児島県の知覧から神風特別攻撃隊として飛び立っていく特攻隊員の姿を描いたもの。私はこの両作品に大いに注目した期待しているが、この『紙屋悦子の青春』には、明石少尉の特攻場面は全く登場しない。しかし、それだけに余計に明石少尉の悦子や永与少尉に対する思いが伝わってくるというもの……。

交際している女の子をめぐるトラブルで2人を殺害した大学生や、日・中・韓の仲間（？）でカリスマ女医の娘を誘拐した悪者たちも、真剣にこんな映画を観たり、また『出口のない海』や『俺は、君のためにこそ死ににいく』に期待するような感受性を持っていれば、あんなバカげた犯行に走ることはないはずだと、私は思うのだが……。

2006(平成18)年6月30日記